

〈実践報告〉

思い出からたどる望ましい特別活動指導法

柴田育郎(Ikuro Shibata)

はじめに

本大学で「特別活動指導法」の授業を2年間担当してきた。コマ数にして7、受講生は282人である。授業の内容は「特別活動の理念・歴史・意義・目標・指導理念・評価」等の総論から入って、「学級活動、生徒会活動、行事の実践例と具体的な指導方法」へと進む一般的な展開である。教職を目指す学生たちに「特別活動とは何か、どう指導するべきか」を教え、将来に役立ててもらうことをねらいとして、文献や学習指導要領の記述を基盤にしつつ自分の経験を加えて分かりやすく話していこうと考えた。

しかし、授業に入り、学生たちへの調査や受講カードの意見・感想を読むうち、徐々に考えが変わった。「望ましい指導の在り方」はすでにこの学生たちの中にある。

私は小・中学校の教員を38年間勤めてきた。学生たちが中学生まっただ中の頃に5年間公立中学校の校長を務めている。小学生だった頃にも3年間小学校長を勤めてきた。つまり、この学生たちが受けてきた義務教育の成否について直接責任の一端を負わされている立場である。そう考えると、この授業は私にとっても意義深く、学生たちの思い出を掘り起こすことでその成否の確認ができる。何が効果的で、何が課題かを、実際に指導を受け活動をしてきた学生たちから引き出す。それが今後の特別活動指導法の在り方を示すことに他ならないと考えて、実践報告をまとめた。

1 特別活動の意義と現状

(1) 特別活動の教育的役割

特別活動は教科指導中心の学校教育の中で、潤滑油的な役割を果たし、生徒の社会性を育み、生涯学習社会を生きる基礎をつくる一教科指導と特別活動は学校における教育活動の両輪である。このことはどの学校・教員も理解し、だからこそ貴重な時間を用いて計画・実践している。しかし、「教師の命は授業」「教師は授業で勝負する」と明言する教員が多い。「授業」とは教科の授業である。中・高の教員なら自分の専門教科の授業の質をいかに高めるかに日々努めており、特別活動をそれ以上に考える教員はあまりいない。私自身も特別活動の指導に自分の存在価値を置くほど重視はしていなかった。

しかし、あらためて特別活動に視点を当てて学校の役割を見つめ直してみると、その価値の大きさに気付かされる。生徒の人生や生き方に大きな影響を与えるのは教科指導よりもむしろ特別活動ではないかと思う。「あの行事で自分が変わった」「あのクラスがあって私は立ち直れた」「あの時の感動が今の私を支えている」といった感懐をもつ学生が少なくない。教師が何気なく、あるいは恒例的に行った特別活動が大きな教育的効果を生んでいることを教師自身はあまり意識していない。

(2) 限られた時間数のなかで

中学校学習指導要領に示された特別活動の内容は「学級活動(高校：ホームルーム)」、「生徒会活動(小学校：児童会活動)」、「学校行事」の3つ(小学校はクラブ活動がある)。時間数は各学年とも年間35時間(週1時間)しかなく、しかもそれは「学級活動に充てること」とされている。では一体、生徒会活動や学校行事はどの時間で行うのか。

まず生徒会活動は多くの学校でこれまで週2コマあった学校裁量時間(空きコマ)のうち1コマ、ないし隔週の0.5コマを利用していた。

【空きコマ：改訂前】

〈中学校1～3年〉

【空きコマ：改訂後】

	月	火	水	木	金
1					
2					
3					
4					
5					
6					

生徒会活動 ↗ ↘

	月	火	水	木	金
1					
2					
3					
4					
5					
6					

週当たり28時間 年間980時間

週当たり29時間 年間1015時間

学習指導要領改訂前は空きコマが2時間あったため、その時間に授業を入れず、部活動や生徒の下校時刻を繰り上げて職員会議や現職教育を行っていた学校が多かった。生徒会活動(主に委員会活動、生徒総会等は特設)は会議等を行わない週に実施するという形で時間を確保していたのである。改訂後の空き時間はわずか1コマになったため、十分な確保が懸念される。

次に学校行事であるが、これは標準時数もその確保方法も示されておらず、時間割にも位置付けられていない。いつ、どこで、何時間くらい実施されているのか。私がこの“か

らくり”に気付いたのは教務主任時代、それも平成3年～5年に勤務した足助町立（現豊田市立）足助中学校で文部省研究委嘱により「学校週5日制」を研究した時のことである。もちろんそれ以前から学校行事に充てる時間はどこでもそのようになっていたのであるが、さして気にも留めずに企画し参加していた。一般の教員の意識はそのようなものである。

「学校週5日制」研究の使命は、その実現に際して不都合や不安を除くことで、中心は教科の授業時数の確保と休業土曜日の生徒の受け皿づくりであった。特に授業時数に関しては5日制を試行していない学校以上にシビアに計画しチェックしなければならなくなった。その折に格闘したのが授業時数の確保と学校行事の時数との“せめぎ合い”である。

学校行事の時間は学習指導要領に示された標準授業時数（学校教育法施行規則別表）が年間35週（小1年は34週）で示されていることから生じる。カレンダーを見ると1年間はおよそ52週ある。この差が学校行事を可能にしている。しかし52週－35週＝17週がまるきり使えるわけではない。17週のうち、祝祭日が15日で約2週間、夏休みで6週間、冬休みで2週間、春休みで2週間、合計12週間は非授業日である。残りは5週間で、週3コマとすると150時間しか残らない。しかも入学式、卒業式、定期テスト等の日は授業打ち切りで下校とする。さらに台風やインフルエンザによる休校、閉鎖も大いに可能性がある。こう考えると最大でも100時間程度で学校行事を計画する必要がある。余裕を見れば80～90時間以内が適当である。なお、愛知県では20年ほど前から「高校入試の複合選抜」により中学校の卒業式が3月10日前後の実施を余儀なくされており、3年生は1・2年生より10日程度授業日数が少ない。時数にして60時間分減となり、おそらくどの学校も標準時数をクリアできていないと思われる。「標準」はあくまで「標準」と考えて、必要な行事は欠かさないという姿勢でいるのが学校の現状である。

2 生徒の側から見た特別活動

(1) 心に残る特別活動

授業を受けているのは中・高校免許取得をめざしている学生で、8割以上が1年生である。中学を卒業したのが4年前、高校を卒業したのはほんの1か月前ということになり、記憶は鮮明である。彼らが特別活動をどう受け止め、どのように参加してきたか、教職を目指す立場から見つめ直すことで、特別活動の在り方が理解されるのではないか。

第1回目の授業で以下のアンケート調査を行った。

「中学校時代に特に印象に残っている特別活動（行事や諸活動）を下記の中から3つ選

び、その記号と思い出を簡潔に書いてください。」

A 修学旅行 B 宿泊学習 C 自然教室 D 体育祭 E 文化祭
 F 生徒会 G 委員会 H 学級会 I 職場体験 J 福祉・介護体験
 K 卒業式 L 入学式 M 部活動 N ボランティア活動 O 海外派遣
 P 国際交流 Q その他

受講生の8割は愛知県公立中学校出身で、あとの2割が岐阜・三重・静岡・その他の県・私立中学校の出身である。名称等のごく一部を除いてほとんどの内容が理解されている。

「心に残っている特別活動」と回答したもののうち、多かった順に並べてみる。

活動内容	部活動 *1	修学旅行	体育祭	文化祭	職場体験	卒業式	生徒会 *2	宿泊学習	国際交流	自然教室	ボランティア	海外派遣	学級会	福祉介護体験	入学式	その他	回答者数
人	184	171	114	67	57	53	33	27	27	18	12	9	7	6	6	11	282
%	65	61	40	24	20	19	17	10	10	6	4	3	3	2	2	4	100

*1：特別活動ではないが、改訂で「教育課程と関連付けて指導するもの」とされた

*2：生徒会と委員会を合わせて集計した

これまで教育課程外とされてきた部活動が第1位となっているのは皮肉だが、3年間最も多くの時間と労力を注いだ活動であることを考えると、当然ともいえる。それ以外では修学旅行、体育祭、文化祭（その他で合唱コンクールが数名あり、単独で実施している学校の出身者と思われる）、と続く。残念なのは学級会で、特別活動の中で唯一、週1時間位置付けられているにもかかわらず、印象が薄い。なお、年度や学部による差異はなかった。

(2) 学級活動

学習指導要領における学級活動の目標は「望ましい人間関係の形成」と「自主的・実践的態度の育成」である。その内容は(1)「学級や学校の生活づくり」(2)「適応と成長・健康安全」(3)「学業と進路」となっている。この時間は担任教師が自由に使え、望ましい学級像を描きつつ、1年間の様々な活動を通して生徒との絆を深める有意義な時間である。但し、その内容はさほど意図的・計画的なものではなく、その時期に必要な活動を行うだ

けで、時間を消化していきがちである。学期当初の組織作り－学級委員選出・学級の係・座席・清掃分担・給食当番等、学年行事－修学旅行・宿泊学習・自然教室等の準備や役割分担、学校行事への参加－体育祭・文化祭等の準備や練習、生徒会活動－委員会所属決め・役員選挙立候補者選出・卒業生を送る会準備等、進路関係－職場体験準備・進路説明・個人面談等、これだけでも時間が足りないくらいである。担任が特に意図して行うのは「いじめ」や「問題行動」が発生し、緊急に対処せざるを得なくなった場合や学期初めや年度末の「学級レクリエーション」・「お楽しみ会」くらいであろうか。

しかし、こうした一般的な活動の中で本来の目標が達成されていくのも事実で、学級会を「印象的だった」と答えた学生のコメントに以下のようなものがある。

- 学級委員をよくやっていてクラスの前に立つ機会が多かった。大人数がまとまって何かやるのは大変だったが、楽しかった。(多治見市出身男子)
- 友達といろいろ話し合う事ができた。自分の意見と他人の意見とがぶつかり合っとなかなか決まらず、議論する難しさを学ぶことができた。(名古屋市出身男子)
- ずっと室長をやっていて、体育祭・音楽祭・レクリエーションに色々と関わり、皆をまとめようと自分なりに頑張った。大切な思い出。(名古屋市出身女子)
- 中学3年間通して学級会の役員として活動していた。3年間の日々のすべてがここにあったと思っている。(豊田市出身男子)

議論を通してクラスをまとめていく、その難しさを体験した充実感や喜びがうかがわれる。ただ、どの学生も常にその立場にあったということから、学校ではリーダー的な資質をもった生徒がいつもその役割を負わされる傾向にある。担任としては好都合だし、またそのようにクラス編成をしているのも事実である。しかし、リスクはあるものの、もっと多くの生徒に機会を与えて、リーダーシップを身に付けさせていくべきであろう。

(3) 生徒会活動

生徒会活等の目標も学級会とさして変わらず、学級から全校へとスケールを大きくしたものと考えられる。但し、委員会の組織や活動や全校行事への関わり方を考えると、1年生から3年生までの縦割りの活動となり、「先輩・後輩」の関係が社会に出てからの「上司と部下」の関係にもつながり、より大きな意味もっている。先輩への敬意やフォローシップ、逆に後輩への配慮やいたわり等を学ぶ機会となっている。活動のねらいとしては生徒による自治意識だが、学校運営上どうしても形ばかりのものにならざるを得ない。完全に生徒に任せれば時間がかかるばかりでなく、行事等の円滑な運営も保証されない。下

手をすると生徒と教師間の対立を生み、高校では紛争にまで発展しかねない。したがって、名目上は生徒による自治だが、あくまでも教師の指導に基づき、許容範囲で任せているのが実態だ。学校生活は社会に出るまでの準備期間であるから、それで良いと思う。

直接指導する教師は「生徒会顧問」と呼ばれ、たいていは若手中堅教員の中から、職務に意欲的で信頼感のある者が校長に指名される。生徒会役員に指導し易いというところから3年生担任であることが多く、副顧問に次年度の顧問を想定した2年生担任を付けるのが一般的である。

生徒会活動を「印象的だった」とした学生のコメントは以下のようである。

- 副会長を経験した。最初は自分だけが空回りであまりうまくいかず、辛い思いもしたけれど、呼びかけに変わっていくみんなの姿にやりがいを感じた。(大垣市出身女子)
- 先生に勧められて立候補した。人前で話すことが苦手だったが、何度もやっているうちに慣れた。色々な面で成長したと思う。(大府市出身女子)
- 生徒の代表ということで厳しく大変だったが、みんなから「ありがとう」とか「楽しかった」という言葉をかけてもらい嬉しかった。(愛西市出身女子)
- 恵まれない子供達のために何かしたくて募金活動を始めた。あのときゼロからスタートした「1円玉募金」は今でも続いているらしいので嬉しい。(豊橋市出身男子)
- 夏休みは休みがないほどたいへんだった。自分が提案した企画が通り、全校のみんなの協力で成功し、「お疲れさま」と言われた時は嬉しかった。(豊橋市出身女子)
- 書記として活動した3年前期はとても充実感があつた。何かの中心になって働き、人の役に立てていることが実感できた。(小牧市出身男子)
- どのようにしたら学校が良くなるのかを考えているうちに今思えば大切なことを学ぶことができ、とても成長したと思う。(幸田町出身男子)
- 活動を通して、一人では何もできないこと、協力することの大切さが身にしみた。みんなで作ることの素晴らしさを知ることができた。(蒲郡市出身女子)
- 体育祭の生徒会種目を職員会議で提案した。先生たちからの鋭い意見をもち帰っては企画を改良するのは大変だったが、とてつもない達成感が得られた。(小牧市出身女子)

「印象に残っている」と答えた学生のほとんどが生徒会役員の経験者だった。自分で企画したことが実現できた達成感、そのことで仲間感謝された時の喜び、この経験は人間を大きく変える。少なくとも前向きな人生を目指していくに違いない。生徒を職員会議に出席させて提案させるという学校の、勇気と形だけではない指導姿勢には驚かされる。

(4) 学校行事

学校行事の目標は「望ましい人間関係の形成」と「集団への所属感・連帯感を深める」ことにあり、内容は「学校生活に秩序と変化を与える」ものとなっている。前述したようにどの学校でも限られた時間の中で、最大限の効果をもたらすように計画・実践されている。それは教科指導の“添え物”ではなく、極めて有意義で、生徒たちにかげがえのない思い出を残し、将来に大きな影響を与えている。

ア 儀式的行事

儀式的行事には入学式・卒業式・始業式・終業式・立志式・周年式等があるが、学生たちの思い出は圧倒的に「卒業式」である。

- 先輩の卒業式も自分の卒業式もすごく感動的でした。後輩から送る合唱と先輩から返す合唱でいつも涙が出ました。自分の時もクラスの解散で泣いてしまい、涙、涙、3年間色々学べた母校を卒業することは本当に悲しかったです。(各務原市出身女子)
- 大切な学校、大切な人たちと当たり前に出会えなくなる寂しさですごく泣いた。一生忘れられない日です。(名古屋市出身女子)
- 体育館を真っ暗にしてペンライトを振って歌うのは感動した。(常滑市出身女子)
- 式の後、担任の先生がクラスの一人一人に手紙を書いて読んでくれた。「絶対泣かない」と言っていた先生が泣いてくれた。(稲沢市出身女子)
- 男子にボタンをもらったのも、すごく良い思い出です。(名古屋市出身女子)
- 色々な思い出が蘇り、何とも言えない寂しく虚しい感じがした。(名古屋市出身女子)
- 3年間の集大成として「答辞」を読ませていただいた。周囲の人に心から感謝し、この幸福を還元したいと思い、教員を目指す意志が固まった。(桑名市出身女子)
- 不登校生だったので、たった一人の卒業式だった。(男子)
- 内緒で計画した「先生との思い出」を話した時、泣きながら「ありがとう」と言った先生の笑顔は一生の宝ものです。(小牧市出身女子)
- 式場にハンカチを持っていくのを忘れて、大事に着ていた制服が最後の最後にぐちゃぐちゃになってしまいダブルで悲しかった。(犬山市出身女子)
- 最後の瞬間が最高だと今までの辛かったことも忘れちゃった。(名古屋市出身女子)
- 卒業式は自分がたくさんの人々に支えられて生きていると実感した日だった。両親をはじめたくさんの人々に感謝して涙を流した。(豊田市出身女子)

卒業式は各学校とも様々な意匠を凝らすのが、最近は特に「合唱」が生徒の気持ちを盛り

上げていることが分かる。そして印象に残る決定的なものは「先生の涙」「先生の最後の言葉」のようだ。卒業式での教師の姿を見て教員を目指したという学生も少なくない。

イ 文化的・体育的行事

文化祭や体育祭は人気のある行事である。5～6月に体育祭、10～11月に文化祭を実施している学校が多く、両方を一緒にして学校祭としているところもある。また、文化祭と合唱コンクールを分けているところもある。

体育祭は内容が陸上競技大会的なもの、球技大会的なもの、競争遊技的なものとあり、そのミックス型も多いが、学校によりウエートのかけ方が異なる。年度当初の学級づくりに役立っている部分が多く、クラス対抗の「応援合戦」や「学級旗作り」にエネルギーを注ぐ。またこれを全校縦割り集団にして学校の活性化を図っているところもある。

文化祭は秋の実施が多く、「総合的な学習の時間」や「選択教科」の学習内容をまとめて発表する機会としたり、美術科、技術・家庭科、文化的部活動等の作品展示の場にしたりしている。しかし何と言っても目玉は学級対抗の「合唱コンクール」で、ここに至って生徒たちの感動は頂点に達する。当日までの数ヶ月間（早いクラスは4月から）練習を重ねていき、長期にわたってクラスの団結力を競う悲喜こもごもの“ドラマ”が展開される。中学校におけるこのような形の文化祭（合唱コンクール）はもう30年以上も続けられている。生徒に「目標をもって生活させる」、「集団の連帯感を育む」という意味で、たいへん効果的な行事といえ、これに代わる画期的な内容はまだ聞かない。

学生たちの思い出も実に様々だが、以下に代表的なものを掲げる。

〈体育祭〉

- 自分たちで一からダンスを作り踊った。小学校までとは違い、自分たちでやることのたいへんさや達成感を知ることができた（岡崎市出身女子）
- 優勝して、担任の先生を一輪車に乗せて運動場をパレードした。（田原市出身女子）
- ラインを外して失格したクラスメートを責めず、「よく頑張ってくれた」と皆で拍手をした。人間の心の優しさ、温かさを感じた。（大府市出身女子）
- 事前にグラウンドの雑草取りを行った。重さをkg単位でポイント化し、各軍の得点として加算するというシステムを提案し、実行しました。（土岐市出身女子）
- ソーラン節が伝統、地域の方からも好評でアンコールも出た。（東員町出身女子）
- 陸上で培った俊足を見せびらかすため毎年張り切って走った。（名古屋市出身男子）

○「自分たちでつくる体育祭」がテーマで、準備も審判もすべて生徒がやった。終わった後は達成感だけではなく、すがすがしい気持ちになった。(大垣市出身女子)

〈文化祭〉

○はじめはやる気もなくバラバラだったクラスメートの声が、本番の舞台上で一つの塊となって聴こえた瞬間には心が震えた。(桑名市出身女子)

○皆が大きな口を開け、目を輝かせて歌ったあの瞬間は忘れない。(一宮市出身女子)

○地域のホールで、オーケストラの伴奏付きで合唱を発表した。地域の人、家族、多くの人に感動を与えられた文化祭だった。(安八町出身女子)

○朝や授業後の練習で先生が怒ったり、人が集まらなくてもめたりというのを乗り越えて、だんだんうまくなり、まとまっていく感じが大好きだった。(春日町出身女子)

○練習は皆とぶつかったり、先生とぶつかったりと色々あったが優勝できてうれしかった。歌うことは得意じゃないけど好きになった。(小牧市出身女子)

○パートリーダーになり皆をまとめるのに苦労した。本番前日にクラス全員に宛てた手紙を渡し、皆で大泣きし、本番にはとても上手に歌えた。(名古屋市出身女子)

ほとんどの学生がやり終えたときの達成感や感動を述べており、その感動はそれまでの苦しみ比例している。こうした行事はできる限り「生徒にやらせてみること」、「苦労させてみること」に尽きる。教師は表に出ないようにするものの、陰でしっかりとリーダーを支えてやらないといけない。その根気とタイミングが肝要で、常勝を誇る担任はそのコツをつかんでいるといえよう。しかし、入賞を逃した生徒たちにも、その過程を教師がどう評価してやるかで、生徒の苦労をその後の学級経営に生かすことができる。

ウ 旅行・宿泊的行事

1年生－宿泊学習、2年生－自然教室、3年生－修学旅行のように各学年に宿泊を伴う行事が位置付けられている学校が多い。1年生は中学生としての自覚や規律を学ばせる、2年生は自立心を養う、3年生は集大成と視野の拡張を図る、といったねらいに重点が置かれる。この中で最も印象に残るのは圧倒的に修学旅行である。

修学旅行の目的地は愛知県公立中学校については教育条例上、関東か近畿以内に限定され、他県や私立は北海道から沖縄、外国と様々である。内容や形態は、一斉見学、グループ探訪、体験学習、ホームステイ等様々で、それらを組み合わせた形の学校が最も多い。「遊ばせる」時間と「勉強させる」時間の両方を位置づけ、“有意義で楽しい”思い出を残させたいという教師の思いや配慮がうかがえる。

〈修学旅行〉

- 東京に行きました。行く前はすごくわくわくしたのを覚えています。班でどこに行くか、何をするかを話し合いながら計画するのが楽しかった。(岐阜市出身女子)
- 友達と一緒にディズニーが楽しく、ホテルで色々秘密の話をした。(蟹江町出身女子)
- 教科書に載っている建物や像を見たときに、歴史の流れを感じた。(菊川市出身女子)
- 自分たちで決めたルートで東京散策をした。「自分の夢を叶えている人に会いに行こう」という企画から、漫画家さんに会う貴重な体験ができた。(弥富市出身女子)
- 地下鉄で駅員が人を押し込んでいた。東京の人の多さに驚いた。(名古屋市出身女子)
- 3日間過ごすことで、いつも一緒にいる友達やクラスメートの違った一面を知ることができ、友達が増えた。人間面でも大きく成長できた。(名古屋市出身女子)

〈宿泊学習・自然教室〉

- 険しい山道や崖などを乗り越え、途中で雨が降り視界が悪くなって大変だったが、山頂の小屋に着いた時の達成感が忘れられない。(中野市出身女子)
- 自然の中で過ごすことで落ち着き、自然の大切さを実感した。(蒲郡市出身女子)
- カレーを作ったり、火を囲んで歌ったり、皆で何かをする喜び、楽しさがあり、ずっと温かいものが残っている。あの時間が今思い出せる青春だった。(春日町出身女子)
- 夜友達とおしゃべりをした。クラス替え後すぐだったので、この合宿を機に仲良くなった友達がいる。2泊3日というのが初めてだったので印象強い。(蟹江町出身女子)
- 疲れて外の空気を浴びている時、星がものすごくきれいだった(豊橋市出身女子)
- 火の舞をやって最後まであきらめないことの大切さを知った。(蒲郡市出身女子)
- 友達と話していたら朝になり、徹夜状態で20kmのハイキングに行った。最終日に高熱を出して1週間学校を休むはめになり、体力配分の教訓になった。(半田市出身女子)
- 琵琶湖での宿泊学習で、全校でたった7名の沖島小学校に行った。こういう小さな小学校で仕事がしてみたいと思ったのですごく印象に残っている。(犬山市出身女子)

学校外での学習活動、しかも宿泊を伴う行事の教育効果は他には代えがたいものがある。いつまでも生徒たちの心に残るであろう。教師にとっては毎年、準備や世話に相当の負担がかかるが、生徒にとっては一生に一度の機会であることを考えて工夫や労力を惜しまないようにしたい。また、大正時代に起こった木曾駒遭難(新田次郎著「聖職の碑」)や先年起こった浜名湖での豊橋市立中学校のボート転覆事故(係争中)の例からも、天候や災害にも細心の注意と万全の対策を怠らないようにしたい。

エ 勤労生産・奉仕的行事

阪神淡路大震災を契機にボランティア活動がより盛んになり、高齢化社会が進むことによって福祉・介護の在り方が問われ、「フリーター」や「ニート」の存在が社会問題化するとキャリア教育の重要性が叫ばれるようになった。学校でもこうした社会の要請を受け、積極的に教育活動に取り入れるようになってきた。「総合的な学習の時間」と学校行事を組み合わせて各学年あるいは全校で計画・実施している学校が多い。

特に職場体験は文科省が「キャリア教育推進事業」として補助金を付けたため、愛知県でも5年ほど前から「あいち職業体験道場」の事業が発足し、現在はほぼ100%の公立中学校で実施されている。学生たちの「印象に残っている行事」にも「職場体験」をあげる学生がかなりいる。行政主導の形にはなったが、期待以上に成果は大きいと言える。

- 自分の行きたい職場を決めて、そこに自分で電話してお願いした。私は市の給食センターへ行った。給食のありがたみが分かり、以後残せなくなった。(愛西市出身女子)
- 飲食店に行った。この体験によって、バイトをする今でも「お金をもらうという事は大変なこと」という思いを持ち続けられている。(名古屋市出身男子)
- 果樹園で体験した。屋外の仕事で辛かったが、親も農業の仕事をしていたので、同じように大変なのだろうと感じた。(菊川市出身女子)
- 保育園で3日間子供達と過ごし、あらためて子供が好きだと感じた。(西尾市出身女子)
- 介護施設で、こういう職業が向いているかもしれないと感じた。(川根本町出身男子)
- 図書館で体験した。ここで将来は司書になると心に決めた。(宇佐市出身女子)
- 食品売場を体験。親の苦労やお金の大切さ身をもって知った。(東海市出身男子)
- 地元の新聞社の記者に同行した。現場に行き取材したり、インタビューしたりした。その時書かせてもらった記事を今でも保管している。(豊田市出身女子)

保育園や幼稚園に体験に行き、保育士や教師になる道を選んだという学生が非常に多かった。そのほかにも上掲のように、働くことの意味を知り、自分の進路に影響を受けた者が少なくない。趣旨やねらいは十分に達成されているとあってよく、今後も続けてほしい行事である。しかし、生徒に交渉させるとはいえ、受け入れ先への予備交渉や気遣いなど教師側の労力も大きい。次年度の受け入れ先を「事後アンケート」などからデータベース化していくことで、年を経るごとに円滑になっていくであろう。

(5) 部活動

サッカー日本代表のザッケローニ監督が、日本のスポーツ選手育成は学校教育が支えて

いることを知り賞賛していた。教育課程外であるにもかかわらず、一般の教師がこれほどまでに関わり、熱心に指導している国は例を見ない。20年ほど前には文部省（当時）が教員の負担を軽減するために社会体育への移行を示唆した時期もあったが、結局状況は変わっていない。それどころか今回の学習指導要領ではついに「部活動は自主的な参加で、教育課程と関連付けて」という記述が加わった。これは行政的に十分な受け皿が用意できないこともあるが、学校の教師が指導する部活動の成果を高く評価していることに外ならず、誰しもが認めているところである。

学生たちの回答では65%以上が強く印象に残っていると答えており、その思いも熱い。

- 何度もくじけそうになった。上手になりたいと思い、辛かった練習に耐え抜いたことが私を成長させてくれたと思っている。（豊橋市出身女子）
- 月～日まで毎日の練習が辛くて、先生もとても厳しくて、辞めたいと思ったことが何回もあったけど仲間と一緒に3年間やり遂げた。（豊明市出身女子）
- キャプテンになった時、顧問の先生が支えだった。「人としてどうすべきか」を何回も教えてくれた先生は今でも一番好きな恩師。（幸田町出身女子）
- 寒い日や暑い日、風の強い日や雨の日でも毎日練習しました。頑張ってよかったと思います。顧問の先生には本当に感謝しています。（名古屋市出身女子）
- コンクールで金賞をとった時は生まれて初めてうれし涙が出た。（犬山市出身女子）
- 剣道部部長となって初めて迎えた県大会で、先生から往復ビンタを受けた。家族以外の大人から本気で怒られたのは初めてで先生の愛情を感じた。（桑名市出身女子）
- 中学時代は部活なしでは語れない。たくさんのことを学び成長できたと思う。顧問の先生に出会ったことがきっかけで教職を目指そうと思った。（名古屋市出身女子）
- 野球部に入っていた。毎日仲間と日が暮れるまで、泥だらけになってひとつの目標に向かって頑張った。（いなべ市出身男子）
- 教員になりたいと思ったきっかけが部活動だった。仲間の大切さや人として大切な挨拶や礼儀などを学んだ。それがなかったら今の私はいない。（名古屋市出身女子）

いずれのコメントからも痛い程の思いが伝わってくる。これほどインパクトのある指導は残念ながら教科や道徳の授業ではできない。教師が毎日、自分の生活を捨てて打ち込み、生徒と喜び・悲しみ・怒りを共有しなければ得られない教育成果である。しかし、部活動の指導を「命」と考えるいわゆる「部活バカ」の教師を礼賛するわけではなく、よりバランスのとれた教員が望ましいと思う。「部活バカ」ではなくとも、ほとんどの中学教師が休日

を返上して部活指導に当たっている現実がある。優れた日本の教育の一端をこうした教師の献身的努力が担っているのは確かであり、素晴らしいことでもあるが、一方でどこかに無理があるような気もしている。少なくとも日本人以外ではできないであろう。

3 授業での試み

特別活動の重要性や望ましい指導の在り方を理解し、学校現場で意欲的に実践できるよう、授業では次のような工夫をしている。

(1) 思い出を掘り起こす

冒頭で述べたように、「望ましい指導法は学生たちの経験、思い出の中にある」と考えて、できるだけその思い出を引き出すようにした。まだ経験が新しいことと、出身地が幅広く、各地・各学校の実施状況や指導方法の違いや共通点が学生の数だけ知れることが利点である。アンケートや受講カードから得られた感想やコメントを授業の中で紹介していく。すると、それについての反応があり、それをまた紹介していく。「そんなやり方があるのは知らなかった、私の学校でもやればよかった。」とか、「そんな先生もいるんだ、私も教えてもらいたかった。」など、自分の経験した事以上の情報を知ることができる。そのうえで、私から学校側・教員側から見た解説を加える。もともと指導法のマニュアルはないから、こうした過程の中で、各自がどのような指導が有意義で生徒にとって効果的なのかを確かみ取ってくればよいと考える。

(2) 映像の利用

思い出を喚起するために、私の前任校（豊田市立下山中学校）で撮った写真をスライドショーにして見せている。数年間の学校の活動記録のうちから編集して、1年間を通したものの、各行事や活動毎のもの、を随時使っている。私の在任期間（平成17年度～21年度）がちょうど学生たちの中学校時代であり、同年代の現実味があると思う。

また、そのほか歴史的記録映像により戦前・戦後の時代背景や学校や子どもたちの様子を知ってもらったり、教師の資質にかかわる映画のシーンなども取り入れたりしている。

(3) ワークショップとディベート

時には参加型の授業も刺激になると考えて、ごく一部に取り入れている。ワークショップの方は「学級活動」の内容に関わって、年度当初の学級づくりに役立つ「対話力アップスキル」（目白大学 多田孝志著より）を行っている。じゃんけんをして勝った方が相手に何でもひとつ質問できるというものや負けた方が勝った方の良いところをほめまくるといった簡単なものである。グループエンカウンターに近いといってもよい。

またディベートは「生徒会活動」の内容に関わって、討論の仕方を学ばせる方法を身に付けてもらうためのものである。3人対3人程度のグループにして、○中学生にも携帯電話は必要だ○修学旅行の小遣いは自由にすべきだ○学校給食は廃止すべきだ○部活動の参加は自由にすべきだ等の中からテーマを選んでディベートをさせる。事前準備もなく行うので、必ずしも活発な討論にならないが、雰囲気だけは味わえる。

(4) 計画案作成

まとめのレポートとして提出させている。テキストとして利用している「改訂特別活動概論」(長沼豊他編著)の演習部分に掲載されている内容を使い、「学級活動の年間計画」、「生徒会活動の活性化案」、「学校行事の指導計画」の内からひとつを選び、様式に従って作成させている。これまでは「学校行事の指導計画」を選ぶものが多く、修学旅行の計画や体育祭の計画、卒業式の計画など内容は様々である。

各自が自由な発想で「自分だったらこんな体育祭がいい」といった思いで作成するので、「少し面倒だったけど、楽しく作れました」という学生が多い。

おわりに

学校における「特別活動」は教科指導と両輪をなす非常に大切な教育活動であることを理解させ、指導意欲をもたせるのがこの授業のねらいである。しかし、正直私自身がそうした意識に乏しく、30数年間、毎年当たり前のように計画し実施・参加してきた。この授業を受け持ち、学生から様々な体験談や感想を聴くことで、あらためて特別活動の意義を実感したとあってよい。教師が想像する以上に生徒の心に響き、学校生活やその後の人生に強い影響を与えている。計画から準備、実施まで負担も不安も多いが、今後も各学校が自身をもって実践されていくことを願う。最後に受講生の代表的な感想を記す。

はじめ特別活動って何だろうと思っていました。でも15回講義を受けて、自分がどんな教師を目指しているのかについて、とてもプラスになりました。色々な行事や活動の例や皆の思い出を紹介していたのが面白く、更に興味をもちました。そして特別活動は子どもにとって学習、生活上とても大事なことなのだと思います。この講義を生かせるよう、教師という職業を目指したいです。

(教育学科1年 女子)

参考文献：「改訂特別活動概論」長沼豊 柴崎真人 林幸克 編著(久美株式会社)

「特別活動の探求」原清治編著(学文社) 「対話力を育てる」多田孝志著(教育出版)